

◀ 「クワンティエンの夢」 ▶

多谷昇太

(四) 蛇

闇に動くものあり。

地を這いて音もなく、滑り行き滑り来る。

その云う様(よう)。な忘れそわれ神々しきもの。

地を這うごとく汝が身を触るに、また異性と交わるに、

その触ればう悦び、汝が身に覚ゆればなり。

我こそは蛇身(かみ)にして神なりき。

いにしえゆ地に君臨せしもの。

外(と)つ国に優りて我をあがめしは

日の本のそなたらにて違わず。

いま奇しき光を見、新しき世に向かうとて、

我を疎遠にするとは何事ぞ。

我を経し来さればそれ得べからざりしものを。

毛離(けが・穢)れて、身削ぎ(禿)をするなら、

我をも具しなむや、子ら。

本源のやすらぎに帰るような日々の睡眠に、人は夜ごと落ちるのだけれど、そして目覚めては身心を回復し、東雲(しののめ)を迎えるのだけれど、その直前、何かの隙をついて心に入り来るものがある。目覚める直前の肉体に、分けてもその五官、触覚に、離れていた幽体が戻る時に、しえからのものはそこに生じる隙を見逃さない。地面ならぬ人の身体にそれは這い来たり、触覚の喜びをとまなつて、すなわち我が身にまとわりつく…。

両の手が身体を這いまわる、この身を確かめるかのよう
に。そこかしこを這いずりまわる。なんという美しい娘…
この私。なんという美の造型…この私の身体。乳房をもた
げ、横腹をさすり、内股を、腰を撫で、究極の官能の場所
へとたどりつく。

すると手がいっしか他者に変わり、娘に代つてそこを愛
撫し始める。ハツとばかり娘は目覚め、必死になってその
何者かを退けようとするが、しかし人の頭とも思うそのあ
やかしは、まさしくそこにこそ執着し、触覚の極限の悦び
を娘に与え続けて止まない。逆らえぬ、力強い両の手が生
えて来て娘の両脚をひろげ、そしてその何者かはついに己
の本性本体を現しつつ、中へと…。

こんどこそ本当に目が覚めた。レースのカーテンから差し込む朝のひかりをまぶしげに見つめる。やるせなげにため息をついてまだ火照りが残る身体をなでまわすが、しかし次の瞬間いまいましげに舌打ちして自分の両の手を交互に払いのけた。常々なさげないこと、いまいましいこととみずからに禁じていた自慰のしぐさが、ここに来てなぜか夢中とは云え止められなくなってきた。まるで何かの予兆のように、拒んでも拒んでも毎夜この身体に来たつては全身をもてあそぶ。これと同じことがちょうど今から三年前にも起こったのだが、今の世の少なからぬ女性たちが為すという、処女マリアへのみずからの贖いをするこゝで、また(ある)道に精進することでもうやくその悪癖を払い退けたばかりだった。しかるにまた…ということでも少なからず娘の心は苛まれざるを得ない。特に今日という日は彼女にとつては神聖で、今日これからある聖所詣でに出発するのだつたが、この様ではそこにおわします聖人に言いわけができません、また集う仲間たちにも面目が立たなかつた。

せめて身体だけでも清めて行こうと思ひ立ち、寝具をほらいのけて、朝シャンならぬ朝シャワーを使うべく娘は風呂場へと向かう。このところ春らしからぬ寒さが続いていて、彼の聖人と聖所になくはならない桜の開花が娘の住む東京では遅れていた。聖地がある関西地方はどうなの

だろろう？ 風呂場の小窓を開けて外を見たが春どころか冬のかもり空が広がっていた。雪さえも降つて来そうだ。先が思いやられたがそれを振り払うかのように、娘は寝間着も下着も勢いよく脱ぎ捨てて全裸となり、裸をするようにシャワーを使い始めた…。

(五) 吉野の桜

「吉野、吉野」。登つて来た吉野山ロープウェイのゴンドラの到着に合わせて構内アナウンスが流れる。山頂は昨夜来の季節はずれの寒気のせいで薄ら寒く、小雪さえ舞っていた。桜のメッカとは云え訪れるにはいささか時期尚早であり、またこの天気とあつてさすがに人の出足はまばらだった。然るに到着したゴンドラからはリュックを背負った娘ばかり九人が出て来、駅前の観光案内版に移動しながらんでに赤い気炎を上げ始める。

「さあ、着いたぞー吉野、吉野。東京からはるばるとやつて来たぞー」とまずリーダーの亜希子が雄叫び(?)をあげる。「うわっ、ここが音に聞く桜のメッカ、吉野ですねえ。感激いっつー！」と取り巻きの郁子が合わせる。他の面々もキヤーとか、ワーとかそれぞれ氣勢を上げるのだが三人ばかり逆らう者がいた。「何がキヤー、感激いっつよ。寒くつてしょうがない。雪が舞つてるじゃない。桜もまっ

たく咲いてないし、こんな時に来た私たちって、まるつきりバカじゃん」とサブリーダーの梅子が云うと、その取り巻きの加代が「そうよ、そうよ」ときつそく応じ、いまひとり恵美という、名とはかけ離れた男まさりの豪気な娘が「ホントすつよね。リーダーは機転が効かないって云うか。中止にすればよかったですよ。梅子さんがそう進言したのに」と聞こえよがしに大声で、且つあけすけに云う。しかし「まー、あんなこと云ってますよ、リーダー」とこちらは慶子とお嬢様コンビを組む匡子（くにこ）がおもねるように亜希子に云い、その相方の慶子が「そうよ。シーズン中の吉野なんて桜じゃなく人波を見に行くようなもんだから、ずらして行こうって、みんなで決めたくせに」とそれに合わせた。残った二人の織枝と絹子は皆の顔を見るばかり、いたつておとなしい性格と知れる。

恵美が慶子らへの反撃代わりにみずからの歌才を披露する。「これじゃあさあ、源実朝の、音に聞く吉野の桜咲きにけり山のふもとにかかる白雪、じゃなくって、音に聞く吉野の桜冬枯れて山にかかるはホントの白雪、じゃないのさあ」と歌を詠んで「な、加代？」と妹分に賛美を求める。「うめえ、恵美」とその加代。お人好し風の郁子も「うまいですう。狂歌の名人」とほめたのか皮肉ったのかとにかく一言。しかし各々に云わずだけ云わしておいてからリー

ダーの亜希子が断を下した。

「慶子の云う通り。私たち白河女子大短歌部は和歌の研修に来たのよ。人混みじゃあ歌境も湧かないでしょ？ 私たちの聖地、西行庵まで行って、そこで歌合わせするんだからね。みんな歌を考えといてよ」。そう云ってはみたものの内心では梅子ら一党の云うとおりと思わぬでもない。觀光には確かにあいにくの天気だったが、しかしどうしても今日と促されるような何かを心中に感じてしまったのだ。自分たち以外の誰かが待っているような、説明不能の何かを…。

觀光案内板を九人で占拠するような形になっていたのだが、その輪の外に最前より来て案内板を見るふりをしながらその実娘たちの会話に相好をくずしている人物がいた。それを見て亜希子が「ちよつと織枝と絹子、うしろにいる人を通してあげて。私たちが邪魔をしているのよ。どうぞ、こちらへ」と云つてその人物に声をかける。「へえ、すんまへんね、ほなちよつとだけ…」と云いながら前に来て「えーつと、西行庵はどこやったかな」と云いつつ案内板に見入るのだが、それよりは横にいる亜希子が気になる様子だった。年のころ七十前後の、頭に白髪がまじった、人品あやしからぬ紳士然とした人物。ややあって「あの、西行庵まで行かれるんですか？」と亜希子に声をかけられると待

つてましたとばかり向きなおつて「へえ。ちよつとお参りに。あいにくの天気ですけど、なんかこう、急にお参りしたくなりましてな。虫の知らせつちゆうか、ありましたんですけど、いま判りました。こんなべつぴんなお嬢様方がようけ来られてるんやったら、虫の知らせとなつたわけや」と答えれば「いやだ」「おじようず」などと面々が黄色い声をあげる。首尾よく受けたせいか顔を赤らめながら老人が「いや、ほんまですよ。ところでいま何となく何とつたら耳に入ったんですけど、お嬢様方もやはり西行庵に行かれるんですか？」と垂希子に聞くのだがそのたずねる表情がいかにまぶしげだ。ひよつとして年甲斐もなく赤面したのはこちらのせいかも知れない。すなわち垂希子。他の八人の娘らもそれなりに各々見られもするのだが、この垂希子はまったく別格の代物だつた。月並みに云えばハツと目覚めるような美しさでも云うのだから、その若いのにもかかわらず面貌にどこか古風な面影があつた。古代の日本の、例えば平安時代の風を感じるような、何とも云えぬ気品があつた。そのゆえはこう云えばいいだろうか、過去現代をつらぬくような生き通しの意志が現れている、とでも。もし人に通世の願いななどというものがあるならばまさしくそれを保っている感があつた。人の美しさは造型だけでは決して測れない。心即如是相となるのであり、その志

が三世を貫くものであるならば蓋しその美しさも桁外れとなる道理である。もつとも確かに造型だけでもこちらも桁外れの美人なのは間違いない。その美女が「はい。お参りに。私たち大学の歌道部なんです。歌聖西行の庵にぜひ詣でたくて、こうして東京からはるばるとやつて来ました」と云うのに「いえ、お参りじゃなくて単なる見学です」と口をはさむ娘がいた。梅子だつた。戸惑う風を見せながら老人が「いや、ま、それはどうでも」と苦笑しさらに「ほー、しかし短歌、和歌ですか。へえー、お若いのに感心ですなあ。もしよろしかったら向こうで歌合わせでもさせていたいただきたいもので。もし、お嫌でなかつたらですが。ははは」と意外なことを云う。「まあ、それはそれは。嫌などとは」とんでもない。こちらこそ是非お願いします。御指導いただければ来た甲斐があります」「いやいや、指導なんてとんでもない。単なる下手の横好きですがな。ははは」などと老人と垂希子が勝手に話を進めるのを梅子一派がいまいましげに聞いている。垂希子には自分の云うことが部の決定事項とでもするような強引なところがあつた。どうかするとほぼ同年齢であるにもかかわらず自分の子供八人を引率するような感すらも時にあつた。しかしではあつても方々の梅子に於いても必要以上に垂希子に盾突く感があつて、今も一言その梅子から来るなど垂希子が感じた刹那駅

前からやや離れたところに路駐していた車がクラククションを軽く二回鳴らした。見れば黒塗りの高級セダンが止まっていて運転席には制帽と白い手袋姿の運転手がおり、後部座席の窓が半分ほど下がって、そこから和服の婦人が白い手を突き出してこちらに振っている。隙間から垣間見えた顔はよくはわからなかったがおそらく三十代くらいの妙齡の麗人と見えた。この老人の娘だろうか、とにかくそれへ手を上げて合図を返したあと「すんまへん、人を待たしてゐるもんでここで失礼します。二時間くらいあとに西行庵へ行きますさかい、もしまた居られたら、是非お手合わせのほどをお願い致します。あの、わたし名前は鳥羽と申しますが、さきほど確かシラカワ女子大とか何とか聞いて……もし失礼でなかったらリーダーの方なり、お名前をお聞かせ願えないでしょうか。初対面でまことに失礼な話で……」と云いわけもできなさうに逡巡するふりを見せるのに「藤原藤原亜希子と申します。その時間にはちょうどいるはずですので、こちらこそ是非……お待ちしています」と云って亜希子は老人、いや鳥羽に頭を下げた。「藤原亜希子……」とおうむ返しに云ったあとなぜか一瞬鳥羽老人は亜希子の顔に改めて見入った。何とも不思議そうな表情を浮かべて何かを感じているようだったがしかしかくすぐに我に返って「いや、失礼。お顔同様すばらしいお名前前で二瞬自失してし

まいました。ははは。まさかあ、藤原九条とか、三条とかのお方ではない……」と聞く途中でまたクラククションが鳴らされた。ふり返って「やかましい！」と怒鳴ったあと鳥羽は「いや、まったく関西人はせせこましくて礼儀も知らずに……ははは。すんまへん、大声出してもうて。とにかく居られても居られへんでも必ず二時間もせんうちにお伺いしますさかい、ひとつ、よろしゅう……では」と云ってようやく車の方へと歩きかけたが何かを思い出したかのようになたこちらを向いて「あ、そうそう、さっきどなたか桜咲いてへんとか云われてましたけど、もうすでに満開ですよ、桜」と云う。それに郁子が「えーうどがですか？ かかる冬枯れぞ、なんですけど」と訊くと鳥羽は面白い子だとばかり笑ったあとで「いや、私には、ですよ。いまが満開の娘さんたちに囲まれて、まぶしい限りですがな」と皆を持ち上げてみせる。さきほど同様匡子らが「いやだ」「お上手」などと黄色い声を上げる。あとあとを考えて、またつい怒鳴ってしまった自分の悪いイメージを払拭しようとしてそうしたのだろう。鳥羽老人はようやく車の人となった。

窓から手をふりながら走り去って行くセダンを見送りながら梅子が「冗談じゃない。嫌だからね、あたしは」とさっそく亜希子にこねた。亜希子の代わりに郁子が「どうしてですか？ よさそうなお爺さんではないですか。その時間

ならちようどお昼御飯でしようから、私がこきえて来たランチを御馳走してあげますよ。梅子さんは安心して自分のお弁当を食べれるから心配しないでください」と云うのに「誰が昼御飯のことなんか云ってるーあたしはあの爺さんと同席するのが嫌だと云っているのよ」と気炎をあげる。

なぜなのか、初対面なのに拘らず本当に虫唾が走るほど嫌なようだ。それを察した恵美が「あの爺！」とまずぶちあげ更に「あの爺、絶対エロ爺だからね。リーダーを見詰める目付きのいやらしいったら、なんの。思わずブツ飛ばしてやろうかと思つた」などと梅子への追従に止まらない悪態を吐く。「まー、あんなこと……」匡子が絶句し「お下品なこと云わないの。歌道部よ、私たち。あんな空手部に入るのを間違えたんじゃないの？」相方の慶子が諫めるがそれに「空手部なんか、ねえー」とまことに男らしい恵美であった。しかし慶子は「あら、そうですか。でもね、もう部長が決めてしまったことだし、いままらお断りもできないでしょ？それに私の勘だけども、あの方相当の歌を詠むわよ。部長が云つた通り、いい勉強になるんじゃない？」と怯まず、匡子も「そうよ。恵美さん、あなた歌合わせするのが怖いんですよ」「なにをー!」「キャー、部長、亜希子さん、助けて」などと喧しい。

「はしけやし翁の歌におぼほしき九（ここの）の子らや

かまけておらむ、よ」亜希子が和歌を一首出す。「何ですかあ？それ」と郁子が訊き「やべ」とたちまち恵美が逃げ腰になる。どうも匡子の指摘が正しいらしい。「年長者を見下すような私たちは情けないってこと。現実には私たちヒョッコじゃ何につけ、かなわないってことよ。むこうから歌合わせしたいって云うくらいだから、慶子が云う通りそれ相当の歌を詠んでしようよ。人生経験の違いから云つても、奇しくも聖地吉野で得た御縁だ、ということからしても、私は頼んでも御一緒にすべきだと思うわ。とにかくもうそろそろバスが来るわ、バス停に移動しましよ」打ち切るように云うのに「何が聖地で、何が御縁よ。万葉集でしよう？その歌。だつたらあたしは、否もうも欲りするままに許すべきかたち見ゆれば我も寄りなむ、とは云わないからね。だいたいあんたあやしいって思わないの？あの爺さんを。吉野のどこに高級車で来たんだか知らないけどさ、西行庵にお参りだなんて出まかせだよ、たぶん。道がわからなければなら運転手に来させればいいのに、自分が出て来たりしてさ。恵美が云つてることあたりが恐らく正解よ。あんた責任あるリーダーでしょ？みんなの安全とか少しは考えなさいよ」などと梅子がもの申す。「安全って、あのお年寄りが私たち九人にとつて危険なんじゃないの？みんなの安

全より、あの人の安全をはからねばならない義務を感じているわ、私は」「部長、そりゃないっすよ」「じゃ、じゃあ、みんなの決を取りなさいよ、決を。何だつてあなたはいつもいつも一人で決めてしまっただから。あたしはねえ……うっ」恵美も梅子もさえぎって「いいから、いいから。ほら遠くにバスが見えて来た。急ぎましょ、バス停へ。それから織枝と絹子、二人でクスクス笑つてないで、こつち、こつち」と亜希子が先頭に立つて動き、その織枝と絹子、郁子と匡子に慶子が従った。梅子一派は渋谷とその後に付いて行く。奈良交通バスの白い車体がコトコトと舌野道を上がつて来て、バス停で止まる。いかにも連携の取れた九人は次々と車上の人となつていった。

(六) 西行庵

尋ぬとも風のつてにも聞かじかし花と散りにし君が
行衛(ゆくえ)を — 西行法師

金峯神社を囲む高い桜や杉の木の梢の間からやわらかな日のひかりが射している。亜希子たちの到着に合わせたかのように曇り空が晴れ始め、南西の方角から、すなわち西行庵のある方角から暖かな春の風が吹いて来た。平安時代以来の古風な延喜式社殿の前に立った時、亜希子の胸中に何とも云えぬ懐旧のような想いが湧いて来て、はからず

も章頭に掲げた西行法師の一首が頭に浮かんで来たのだ。『法師が待っている。再会を喜んで』という何の脈路もない想念が浮かんで来る。実際ここに来て亜希子の心は至つて穏やかではなくなつていた。始めての土地であるにも拘らず前に訪れたことがあるという感じを持つことがあるが、この金峯神社の流造の拜殿前に立つた時がそうで、亜希子にはまったく理解不能のことだった。常々訪問することに慣れてはいたが吉野も、その奥千本の金峯神社も、まして聖所西行庵もまったく初めての地である。その西行の時代で云えばはるか平安の昔、時の上皇が奥方・女房たちや臣を引き連れてここ金峯神社まで御幸したと亜希子は歴史の講義で耳にしたことがあるが、果して自分がその内の一人でもあったものかなどと訝られたりもする。しかし皆の手前いつまでもそんな想いに浸つているわけにも行かず、義経の隠れ堂まで行って帰つて来た恵美と加代の元氣者の帰還を見てやおら皆を促し、神社右横の西行庵へ続く坂道を登り始めた。現在時刻御前十一時半、東京七時発の新幹線以来四時間半の強行軍もそろそろ終りに近づいて来た。聖所は目の前だ。冬からいきなり初夏に急変した天氣に応援を得て、亜希子御一党は運命の苔清水の里へと歩を速めて行った。

「ちよつと、亜希子さん。ここらで休憩しましょうよ

。「私もう疲れちゃった」お嬢様コンビのうち匡子が音をあげて、かなり前を行く亜希子と郁子、織枝と絹子の四人に呼びかけた。こちらの匡子側は残りの五人である。「さつき金峯神社で休んだばかりでしょ。またいくらもたつてないじゃない。もうすぐ、そこよ。頑張つて」としかし亜希子はつれない。「あーら、お弱いこと。匡子お嬢様、おぶつてさしあげましょうか?」と加代が聞く。「イーだ。そう云うあなた方だつて遅れがちじゃないの」「おかまいなく。あたしたちはわざと遅らしているんだから」の遣取に「先に行かせりゃいいのよ。亜希子のやつ、参拝たなんて云つて。西行はただの和歌の名人。何とか教の教祖じゃないのよ。参拝じゃなくつてケ・ン・ガ・クよ、見学」と梅子が自説を賜う。「そつですよね」加代が相槌を打つて「それと梅子さん、もしさつきの爺と本当に歌合わせなんかやらされた時は、私と恵美に加勢お願いしますよ」と頼み込む。「まかせとけ。白河女子大歌道部をなめるな。亜希子のやつ、年配者がどうのなんて、いい子ぶつてさ。今日日金で歌人面(づら)してるやつらばっかりで、スキルも中身もないのが殆どよ。どうせその口でしょ、あの爺さんも。あたしが化けの皮はがしてやるから、加代も恵美も安心していいよ」力強く梅子が請け合つた。恵美が「頼もしいつす。ケンカの時には必ず恩返しますからよろしくお願いします」

と云えば「まー、おつかない。恵美さん、あんた男なの? それにお三人とも爺、爺つて。爺なら…あら、私も云っちゃつた。そんなお爺さんなら応援なんか頼まなきやいいんじゃないの?」慶子が揶揄を入れると「あたしはさあ、歌の感性じゃ負けないけど、古語とかなると今…」などと恵美が言い訳している間に先行組から九人中一番の郁子の黄色い声が伝わつて来た。頭のとっぺんから出るような声でよく通る。「わあ、着いたーこれが西行庵、感激いっつー!」。負けじと亜希子も「着いたわよー! みんな来てー! 梅子、止まつてないで早く来てー!」と大声を出す。しかしうるさそうに「先に、参拝、すればいいじゃんかよ」と愚図る梅子だったが亜希子は辛抱強く待つ様子。「うふふ、梅子さん、見学、でしたよね」と皮肉ほくく確かめる匡子にひとこと「うるさい、見てなさいよ…」と返して渋々と、しかし何か秘策ありげに、取り巻き二人を従えて亜希子の待つ庵へと近づいて行つた。

「うわー、何これ。お粗末うー!」「ほとんどバラック」恵美と加代が実感を吐露し、梅子がしてやつたりとばかり「へー、これが聖殿ねえ。たいしたもんだわ。(中の西行像に) こんにちは、西行さん。それで亜希子、ここで私たちに何させるつもり?」とすっかり自信を取り戻した感じで訊く。他の部員は知らず、恵美と加代は行動的な体育会的



上；西行庵外觀 下；同内部



娘二人で、事前にパソコンなどを使って西行庵を調べることなどしないだろうと読んでいた梅子は、ひそかに今の二人のこの反応を期待していたのだった。読みがヒタリと当たって会心のうすら笑いを顔に浮かべている。おつつけ他の部員たちにしたって恵美と加代と大同小異だろう。ここを参拝などと思いませんまい。さあ、亜希子どうする？…梅子は普段からの怨念を込めて亜希子の反応を見守った。しかし…思いもしなかった無神経娘が余計な口出しをする。「さあ、部長、みんなで拝みましょう、始めに云ってた通り。みんなに号令をかけてください」と郁子がぬかしたのだった。「こ、この…」と云う間もなく亜希子が全員にライン・アップを掛ける。そもそも梅子の思惑も、郁子の依頼発言さえも始めっから気にもしていないようだ。

「なに云ってんの？梅子。郁子の云う通り始めから決めてたことでしょうさっさとお堂の前に並んで。さあ、みんなもこつちに来て。並んで！」あんたが一人で決めたこと…うっ」聞く耳もあらばこそ亜希子が大声で先導する。「私たちの部歌よ。いい？唱和して。願わくは…」と初句を唱えると「花の下にて春死なむその望月の如月のころ。」と全員で唱和し、最後に柏手をそろって（？）一二つ打ったのだった。

—(以下次号)

